



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第八十六号（毎月一日発行）
平成八年十一月一日

北海の 古平風土物語

（五三）

子供たちの四季の遊びと仕事の手伝い (9)

高橋 源 五口

教室では、子供たちの弁当包みとつまごを大きなストープの周りに並べて乾かすと、教室にはもうもうと湯気が立つ。帰る頃までには乾いていてそれをはいて帰るが、これが毎日のように続くのである。

冬の好天の日には、浜や川原に出でたこ揚げをする。たこの上がる高さとうなりを競うのである。中にはたみ一枚ぐらいの大きさのものや、何枚もの連続たこを揚げる者もいた。絵柄も勇ましい武者絵や、筆太に竜虎にちなんだ文字を書いたりして、なかなか勇壮であった。

× × ×
漁家では、毎年十一月頃から

翌年の二月末頃までカレイ網漁やタラ網漁、ガンズ網漁、サメ網漁をするところが多かった。

川崎船を仕立て、それに四人から六人が乗り、石狩湾のかなり沖合いにある根（岩礁）まで出漁するのである。そしてその家の子供たちは、寒さの厳しい浜辺で帰りを待ち仕事を手伝っていた。

ガンズ・カレイは、サメと共に高級なかまはこの原料になり、鰯は開き干しや鰯子漬に、肝臓は肝油の原料として加工場（浜町・横山隆起さんの工場）へ運ばれていた。

「鰯頭の三平汁」や「鰯たつの粕汁」は、寒さの厳しい時季に

は特に好まれた。寒鰯料理は浜の名物のひとつでもあった。また鰯のたつで、各家庭では速成のたつのかまぼこを作って賞味していた。

この鰯網には、時々頭でっかちのトンベツカジカや、大きなタラバガニがかかる。私の家では、叔父（故石岡留蔵）が鰯漁をしていたのでよく貰うことがあり、カニはゆでたほか酢の物にしたり、カジカは鍋にして食べたが大変に美味しい料理であった。

この頃港町方面の海岸では、時化になるとアンコウやガサエビ（シヤコ）が浜辺に打ち上げられた。それを拾って来てはあんこう鍋や共和えにしたが、料理の最高の魚だといわれていた。シヤコはガサエビといっていたが姿、形が悪く、身もぼさぼさしていて、味も良くなかった。そして海で死んだ人に、タコといっしょに食いついていたこともあって、人に嫌われ捨てられていたのである。

悪童連中はこれを教室に持ち込み、大きな鉄鍋（蒸発皿）に入れて煮る。真っ赤になった爪

を取っては、それを五本の指にはめて引つ掻き合う。赤鬼合戦である。引つ掻かれて顔や手の甲に傷をつけられる者もいて、そのたびごとに先生に叱られていた。

「そんなことは赤鬼たちのすることだど！ 学校の生徒がすることでないぞ！」
危険な遊びを戒められた末、寒い冬の廊下に立たされた者もいた時代であった。

当時の物価

× × ×
国定教科書 一冊 五十二銭
えんぴつ 一本 一十二銭
色えんぴつ（一箱八色入）十銭
クレヨン（八色入）十十五銭
筆 一本 五十五銭
ノート 一冊 五銭
肥後の守（小刀）一丁 五銭
筆入り（フリキ製）一個八十五銭
少年倶楽部 一冊 三十五銭
高等科授業料 一か月 五十銭
古平〓余市間定期船料金
大人 五十銭、子供 三十銭
余市〓札幌間汽車賃
大人 八十銭、子供は半額
学生割引で五十銭

——つづく——

遙かなる故郷の思い出

(26)

『きつね』の話

(3)

橘

義

春

寺で預かっている骨壺の中のお骨が夜になると「ガリッ：ガリッ：：」と、音をたてるそ

うだ。
「どんだ？ 晩ゲ（夜）まで待つて、その音を聞いてから帰ったほうがええンでねエが——」
冗談じゃない。ゴエンジョさんも人がわるい。なんだか背筋が冷たくなつてきたようだ。

「帰ります！ 帰りますよ」と言つてお寺を飛び出したが、外はもうす暗くなつていた。

さア大変だ。これから帰れば、おどろ石・おなご石のあたりではもう暗くなつてゐるんでねエベが……。こんなことならお寺からもうと早く帰るべきだったと後悔したが、もうあとのまつりだ。

当時は、港町はまた「ミミタレ」（アイヌ語）とも呼ばれていたが、雨が降ると道路が、ト

ロトロのまるでお汁粉のようになつてしまふ。冬になると馬そりが通るので、そのそりのあとが人の歩く道になる。ところがしばれるとその道がテカテカに凍つて、くつが滑り思うようになつて歩けない。汗びつしよりになつて夢中で歩いた。

もうすっかり暗くなつてしま

鯨番屋に住んでいた頃

——昔の子供たちの遊び——

竹内 コト

私が小学校に入つた頃のことでしょうか。

家が鯨番屋であつたので、ヤン衆といわれる本州から出稼ぎに来ていた人たちが帰つてしまふと、広い番屋はガランとしてしまひます。外が雨で遊べない

つたが、今のようには街灯もないときだ。また運わるく誰も通らない。

いよいよ問題のおどろ石・おなご石のところが近くなつて来た。お寺でおつかない話を聞いてきたばかりなので、心中はびくびくしながら、やつとの思いですまはるおなご石の前を通り抜けてホッとしたが、こわいののは次のおどろ石だ。この石は、崖からどんと突き出ている大きな石である。このおどろ石が「おいで、おいで」をしたらどうするベエ。何かに追つかけられるような気持ちで、一もくさんに

そこを駆け抜けた。

ハアハア息が切れてぐったりしたが、大きく息をつき、安心したせいか力が抜けたようになつてしまつた。

「あーア、えがつたえがつた」その時、どんなふうにとつたものか——、今もつて思い出せない。

(つづく)

天気の良い日は外へ出で、陸にあげてる船の上でパッチをします。

「こんどはほんとコだぞ」と言つと、負けると相手に取られてしまひます。兄たちはよく勝つてきたようですが、パッチをオツケ（大きい）とか中、小に分けて、それをみかん箱いっぱいのためにこんでは喜んでいました。

また、船のあゆみといつて少し厚手の板の上でコマを回し、コマを手の平に乗せたり、コマとコマをぶつつけてけんかをさせたりして勝負を争ひます。

そのほかがつけがあります。

←（次ページ下段へ）

大漁旗と共に 安らぎに祈る

渡辺 ハツエ

月日の経つのが本当に早く感じられる今日この頃です。時は一刻も私の歩調には合わせてくれません。主人に逝かれてから月々の命日も早四回。顧みるに主人存命中の思い出や、葬儀の時のことがいろいろと脳裏を横切ります。葬儀屋さんが納棺の時に、何か一品故人が愛用した物を入れたら良いとのことであれこれ探しましたが、焼いても残る物は駄目だということ、適当な物が無くて困っていると側にいた六年生の孫娘が、

「おじいちゃんの舟の旗がよい」と言ったのを聞いて、

「よくぞ気付いてくれた」と、私は早速押入れから、丁寧に箱に収められてた旗を数枚取り出しました。これは舟を新造した時、縁者や同業者の方がお祝いに贈って下さった大漁旗です。わずか〇・九寸の小舟ですが、

『板子一枚下は地獄』といわれる北の荒海で、主人が長年命を託してきた舟の旗なのです。このことは亡夫の霊が、孫娘に仕込んだ業なのだと私は信じました。

ちなみに、主人が亡くなる前

★『赤い崖』は丸山？

古平という地名は、アイヌ語で赤い崖という意味の『フレ・ピラ』がもとである——といわれている。そうだとすれば、その赤い崖というのはどこをいうのだろうか。

真つ先

に思い浮

古平の

かぶのは丸山である。北側の大きく崩れた崖はところどころ赤く、二百メートル程の山頂近くから三、四百メートルにわたって崖が続き、最も目立つ所でもあり、説得力も十

夜にわが家に泊まった長女が、主人が亡くなった日に私にこんなことを言いました。

「ゆうべね。父さんが帰って来たのよ。風も無いのに父さんの部屋の窓がガタガタと大きく鳴らしてね。父さん家に帰りたかったのよね。」

寂しかったとは言いませんでしたが、これが父親と娘の絆なのだと思います。

亡夫は、きっと私たち家族の心遣いを喜んでくれていると思っています。

分にある。当然のように丸山かな？ と思っていたところ、実は古平川の河口から一き程の上流に高さ約五十メートル、幅約数百メートルの赤い土の崖がある。そしてその崖下のある場所が淵にな

地名

[3]

昔から「赤はげ」と呼ばれていた

子供たちの水泳の場所になっていたという。

また、古平川の上流には『ホロカフレピラ』という地名のあ

←(前ページ下段から)

がつけというのは、竹を幅一センチぐらいに割ったものを四本作り、皮を残して、手を痛めないようにきれいに削ります。それを手に持ってゲームのようにして遊ぶのですが、ガチャガチャとかましい音がするのでよく注意されます。

お正月には、風の具合をみてたこ揚げをしていました。糸がからまって、冷たい風の中、かじかんだ手でそれをほどこしている兄たちの姿をよく見ました。

秋になると山や野に出かけて、昆虫類を捕ってきては虫かごに入れて鳴き声を聞いて楽しみますが、その虫かごも竹や草の茎を編んで作ります。

それにしても昔の子供たちは、四季折々の違った遊びをうまく考えていました。今は何でも「お金、お金……」の時代ですが、その頃は、自分でものを作って遊ぶことの楽しみを知っていました。もちろん、自由にものを買うお金も少なかったせいもありますが——。

子供の頃の味

カルメラってわかる？

福 井 幸 平

子供の頃、よく作って食べたカルメラー。

ザラメ（黄ザラ）を握りこぶし程の大きさの銅の小鍋に入れ、飴のようになるまで煮て、そこへ重曹を入れ、ふわっとふくらませて出来上がり。不思議なことには子供の沢山いる家では、必ずこの小さなカルメラ専用の銅鍋があった。子供のおやつにお金を使わない生活の知恵だったと思う。

さてカルメラか、カルメロか自信がないので調べてもなかなか解らなかつたが、ちょうどブラジルより日本に帰って来ていた、踊りの師匠・花柳龍千多さんと木下多千代さん（旧姓鈴木、古平中学校第九期卒業）とバツタリ逢ってお伺いしたところ、キャラメルのことをポルトガル語、即ちブラジル語でカルメロと発音するんだと教えていた。ほかにシャッポ・カステ

ーラなどなど。日本でもなじんでいる言葉があるようで、私たちの知識としては、ポルトガルと聞けばあの鉄砲伝来のことぐらいか？

いつか、ブラジルで大変出世している木下多千代さんの一代記でも書いてみたいと思うが。

ふるさとスケッチ

沖町を見渡せる高い丘の上に建っている恵比須神社は、嘉永五年（一八五二）、古平場所の請負人であった岡田半兵衛が、セタカムイ岬に通じる道路沿いに創建した。祭神は豊漁と豊作、海上安全を祈って事代主命（コトシロシノミ）と保食神（ウケモチノミ）を祀った。

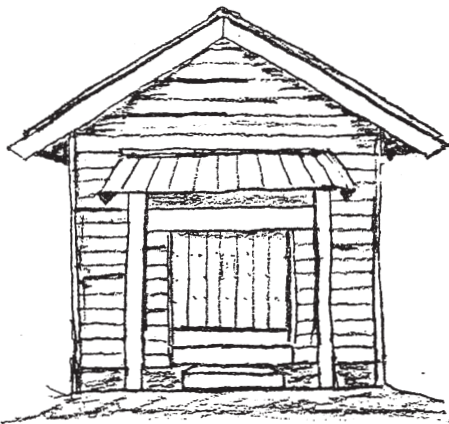
明治九年に社格が村社となったが、明

治四十三年、政府の勧誘で郷社琴平神社に合祀になり、その後ご神体がまた恵比須神社に戻った。

最初に神社の建っていたのは旧セタカムイトンネル付近であったが、落石や大時化などで社殿が危険であることから、その後、古平・余市間山道の登り口近くに移築した。

ところが、昭和二十三年から始まった国道229号線の道路用地にかかることや、昭和二十

沖町恵比須神社



古平美術協会
渡辺 嘉之

七年の台風で社殿や祭事用具が損傷を受けたこともあり、旧沖小学校ご真影奉置所跡に再度移築した。

戦前だと七月十日の例祭には神輿や奴行列もあり、朝九時に神社を出た祭りの行列が方々の家で接待を受け、狭い町内を廻って神社に入るのが夜の十時頃にもなったという。

また、除夜の晩には若い者たちが神社に集まり、徹夜して、参詣に来る人たちにお神酒を出して迎えた。

神社の氏子として、以前から大沢吉三郎・田岸藤吉・八反田寅吉さんが長く世話役をしていた。

現在は、沖町内も戸数や人口が減ってきて以前のような例祭はできないが、琴平神社祭に合わせてお祭りを行っている。神社のいろいろな日常の仕事については町内の当番制にして、先祖から伝わる氏神様として奉仕している。

（小鹿嘉一郎さんのお話を参考にさせていただきました。ありがとうございます。）

俳句

日本俳句協会

摩周湖を訪ふも三度目霧晴れじ

斉藤波留

漁り火の沖にまたたく十三夜

秋祭り小供天狗の練り歩く

大和田伊絵

石段の落葉踏みゆく正隆寺

越野スミ子

水澄める賽の河原に石を積む

虫の声届くことなく老いにけり

土手コース続く限りの草紅葉

山紅葉車窓の景をつなぎゆく

山口 浪

球場の網にかゝりし秋の蝶

越野敏雄

蜻蛉とぶ子の網よりもやゝ高く

熊谷楠丈

向日葵の顔の映れる水溜り

新調の揃いの浴衣夫に着せ

木村芳園

崩落の事故の詳細春寒し

越野清治

船遊利尻巡りや十八里

水見句丈

十六夜の漁り火ゆるゝ沖明り

蠅叩き側にうたたねしてをりし

帰省子の言葉つかいも大人びて

福井幸平

帰省子に干鰯叩いてむしりやり

車^ま駆り馬^せ柵の内なる路を刈り

娘を看取る甲斐なく虫の鳴きにけり

大島喜恵

残業の子に缶ビール冷しをく



絶景や夏積丹の海まぶし

仲谷美砂

文化祭見てお点前の娘によばれ

気に入りのバラを残して退院す

短歌

古平岬短歌会

野良猫のために餌置く友の家雨降る軒に三匹がある
 嘆きなど悟らること予測して運河づたひに身を寄せ歩く
 父に似ると思ひしわれの何時しかに母似と変り老いさびにけり
 「ぢぢばば」と言ひて寄り来る幼孫叱りし親を指して泣きじゃくる
 秋深まり庭の花ばな乱れ咲き今日は休みと空を仰ぎぬ
 眼点を鋭く入れて筆置きぬ描きし達磨は誰が顔なりや
 濃いみどりの運動着きて颯爽とジョギングの友七十歳と思へず
 届きたる祝のカードに日の光り当りて鳴りぬ誕生日のメロデー
 ゆかた着け舞扇かざす孫三人幼きながらも優雅な仕ぐさ
 雨降りて久しぶりなるミシン掛け調子の良さに針のすすみぬ
 幼き日ママゴト遊びに摘みし花その色やさし紫露草
 波の花道に舞ひ散る海を見つつ車走らす友を見舞ふと

池田	魚屋	奥山	金杉	越田	越野	榊	菅原	鈴木	竹内	田中	丹後
テル	友子	きよみ	すみ	由起子	敏雄	佳代	節子	時子	コト	香苗	初江



秋刀魚の歌夫と誦しつつ徳島の友送りくれしスタチを絞る
 頂きしおにぎりの中に雲丹ありて磯の香りの口にひろぐる
 陽焼けせし若き裸身はたくましく祭り角力に揃ひ四股踏む
 百合の香りのオーデコロンをひと押しす雨降り続く午後の廁に
 快き海の微風に子蟹らは素早く走る夏の磯辺を
 故郷に「たまには来よ」となつかしき受話器の向うの兄嫁の声
 「雪近し」と話しかくるか雪虫よ目にも髪にもまつはる親し
 ふるさとに何を思ひて寄りゆかむ父とも恋ひし叔父も逝きたり

轟木富美子
 長崎フユ
 東美知
 堀昭子
 堀典子
 水口キエ
 山口スエ
 山村完名



石井愛子

土井さんに党の面々最敬礼
 敬老会宴に年を忘れさせ
 懐をすり抜けて行く子の巣立ち

豊叩く音も聞かれぬ文化国
 戦争を知らない世代が銃を知り
 お値頃は貧に縁なきコマーシャル

渡辺ハツエ

先月号 お詫びして訂正

① 広葉ちぎりで汲みし岩清水 斉藤波留
 ② 広葉ちぎれて飲める岩清水
 ③ 仲谷美砂 ④ 仲谷美砂 藤

